

はじめに

北マリアナ諸島・サイパン島から数人乗りの小型機で飛び立つ。隣にはバスにでも乗るようにリラックスした表情の地元中年男女。ホテル、ゴルフ場、カラフルな住宅。眼下に南国リゾートの風景が広がる。

視線を前方に向けると、熱帯の樹木に覆われた島が現れる。その島は遠目にも人家が少ないことが分かる。リゾートの雰囲気はしない。樹木の中に、薄茶色の滑走路が不気味に並んでいる。

離陸し2、3分、飛行機はサイパンの海岸線を離れる。と同時に、島ははっきりとその姿を見せる。海岸の崖に打ちつける激しい波。サンゴ礁を抱いて広がるコバルトブルーの海。窓越しから圧倒的な迫力と美しさで迫ってくる。

日本から2000キロ以上離れた米自治領北マリアナ諸島・テニアン島。

島はあることで世界史に名を残している。「原爆基地の島」だ。人類が経験した最も非人道的な大量破壊兵器である広島、長崎の原爆は、ともにテニアンから離陸した特殊改造のB29爆撃機が投下したものだ。

戦後70年以上がたち、戦争は遠い日の出来事になりつつあるが、それでも原爆部隊の基地だったという事実はあまりに重い。テニアンの名が歴史から消えることはない。

しかし、別のあることは時の流れの中で、記憶の風化が確実に進んでいる。テニアンは戦前、多くの日本人が住み、砂糖生産で活気あふれる島だった。

実質30年にも満たない期間だったが、国際連盟の委任統治領という名の事実上の日本領で、本土より大規模な農場でサトウキビが栽培された。多くの日本人が汗を流して働き、「南洋の宝島」と呼ばれることもあった。

「あの戦争さえなければ」

「貧しかったが、楽しかった」

沖縄、東北地方、東京。筆者は戦前のテニアンで暮らした80歳を超えるさまざまな地域の人に会った。テニアンの名を口にする時、ほとんどの人が表情を崩した。

テニアンは太平洋戦争の戦場になり、入植者は筆者のような戦後生まれには想像もできない悲劇を経験した。それでもテニアンの取材だと伝えると、彼らはまるで子ども時代の夏休みでも思い出したように、目を細めて語り始めた。

戦争、原爆の暗い時代のイメージと、島の出来事を楽しげに語る元住民の表情。そのギャップはあまりに大きく驚きだった。一体どういうことなのか…。

本書は現在残る記録と多くの元住民がつづった文章、そして筆者が会った人たちの話をひとつの線で結び、テニアンの歴史をまとめようとした試みだ。

今回、本の形にすることができ、筆者が感じたギャップのなぞをある程度解き明かすことができたのではないかと思っている。

そして、読まれた方に次のことも感じていただけたらと思う。

テニアンは日本から遠く離れた太平洋の小島ではあるが、その歴史は、まぎれもなく日本の歴史の一部であることを。

2019年6月18日 吉永直登